愛皇論

特255
346

始

特255
346

此册子を讀まるゝ人へ

昭和第一年の初、小生聊か感ずる所あり、愛皇論一篇を草し、これを大阪時事新報の社説欄に連載せしに、世上同感の士尠なからずと見え、これを一小册子にして貰ひたしと乞はるゝ事屢である。實は匆卒の起稿で自から不滿足とする所、多々有るから、緩々增補訂正を加へた上再び活字に附したく思ふのであるが、餘り熱望さるゝ多きに任せ遂に意を決して先づ此一文を印刷して其儘小册子とし他日續篇を起稿して之に補ふことゝした次第である。

「凡て愛の欠くるは敬の過ぐるに因る」とは、古人も申したことで皇上の尊崇も其度を過ぐれば弊害を生ずる、又物には必ず反動と云ふことがあつて、天皇を神聖にし奉らんとして餘りに甚しく尊皇を說けば、國民は之を聽くに慣れ且つ飽き漸く說く人を嫌厭し且つ却

昭和 帝國圖書館藏

つて反感を生ずるやうである。心理作用の増長する所如何なる点まで及ぶのであらうか、以前にも既に忌はしい事が一二回發生したのを見て小生は肝を冷したのである。其所で小生は現今の急務は出來るだけ皇民の間に親和友愛の情を強からしむるに在りと信ずるので官僚は皇上に對し奉りて漫りに尊嚴を説き高徳を喋々し遂に阿諛辯佞に陷る如きこと無く、國民は皆我愛する大切なる御方と思ひ、至當の敬禮を以て相近つき奉り、我家の父を思ふ如く、親み仕へ奉るに至らんことを希ふのである、而して我々文筆に從事するものも此事につき大に自から警め且つ慎むことを要するものがあると思ふ。愛皇論は此の如き衷情に發する小生の拙語である、若し一讀の後誤謬を指摘し失言を是正し賜はらば幸甚此上も無い。

昭和二年一月卅一日

土屋元作

愛皇論

（大阪時事新報社説昭和二年一月三日より同十日まで）

土屋元作

一

尊皇尊王は人口に膾炙せる語であるが、愛皇愛王は珍らしき語である、唯本紙は從來屢次これを用ゐるもまだ世人の共鳴を得ず、或は猥りに奇を好んで然樣の新熟語を使ふかと思はるゝ人もあつたであらうが、實は小生は今日の我國に於て愛皇の一義は尊皇以上に必要なる事柄と信ずるもので、茲に少しく其説を述べんとする次第である。

愛皇と云ふは我國の元首たる天皇陛下に對し奉り、國民が親愛の心を捧げ奉ることである、昔時我等幼少の時分は「天子樣を拜むと目が潰れる」と云ふた。天子は民の父母臣民は赤子との思想は今も昔も同一である、然るに其赤子が父母を見れば眼が潰れるとは、誠にたわいない言ひ事で、今では小學生徒も然樣な不條理は默つては受付けぬ。然るに驚くべし此古い詞が其まゝ西洋に傳はつて居て、歐米人の多くは今も猶日本國民は皆然樣に信じて居るものと思うて居る。先年今上陛下が東宮で英國を御訪問の時、彼國の或新聞に「日本に於ては天皇皇后皇太子等高貴の御方を拜する時は目が盲れるといつて仰ぎ見ることを許さ

れないので、行幸啓の時には市民は土下座して額を泥に埋めることを習慣として居る」と書いてあつたと、二荒伯の御外遊記に見える。

當時我國には世界思想界の危險化に懸念する人々があつて、頻に御外遊を諫止せんとした事などもあつたが、外國人は右の如き舊傳を信用する所から、日本人が傲慢で皇太子の御外遊を好まざる如く思ふた。ロンドンに發行する新聞チャーチ●タイムスは「日本皇太子が西洋の蠻國を御訪問になるのは殿下自ら御卑下遊ばす事として殆ど熱狂的とも云ふべき反對があつた」と記し、又「英國人にして日本の事情を知悉するものは今回御來遊の御方は御身代であらうと信じて居る」などと記し、デーリーヘラルドの如きも「日本の皇太子殿下と考へて百の人々が握手し又千の人々が握手を冀つた其御方が神の御末なる日の御子でありや否、握手を願つた人々は巧く爲てやられたのではないかと英人が疑ひ始めたのである」と奇怪なる記事を掲げて居たやうな次第で、日本大使館は遂に堪らず、一日ロンドンの新聞記者協會代表者に對し右の如き無稽の妄說を眞面目に辯駁するの已を得ざるに至つた。是然しながら强ち外人の東洋に關する知識の淺薄なるにのみ因るとは言へぬ。何となれば我國に於て時に皇室尊崇の餘り、陛下殿下を神にても在すやうに言囃し、何彼につけて無禮不敬を咎め、自から君民の間を隔絶せしめるの弊があり、爲めに外面のみを見て內情を知らぬ外人等をして、日本人は今猶天子樣を拜めば盲になると信じつゝありとの謬傳を信せしむるに至るのである。

維新前は天子樣どころか、將軍さへも公方と稱し、其出行の際は每家戶を鎖ざし、家の中から行列も見ること能はざらしめた「下に居らう〳〵」の聲は江戶の市民をして土下座して面を土に附けしめねば已まなかつた。其の威光の赫赫たる所謂飛ぶ鳥をも落とすばかりであるが、土下座をせねば刑罰が立どころに至るので、下民は皆恐れて平伏した。但し其平伏は君德に靡いたのでは無く、刑戮を懼れたのであつたが、唯平伏さへすれば眞に己を敬ふものと思ふたものか、後世の將軍は皆得意揚々の態であつた。大名も亦元和偃武以後三代四代となれば、威張るのを以て己の尊榮を增す如く思ひ、將軍に倣うて「下へ〳〵」と大呼せしめ、二萬石三萬石の小藩主さへ、其管理する國民に自己の面を見せしめぬやうな有樣となり、日本社會の上下は全然隔絶し君民の間に少しも親愛の情が無くなつて居た。

二

當時日本の制度法律道德を維持する任務に當つて居た武士は、儒書によつて其頭腦を造つたものであつた。其儒書の「大學」に、大學の道は明德を明にするに在り、民を親むに在りとある。其親の字を支那の學者が勝手に、新と讀み、民をし親むに非ず民を新にするなりと解したのは、次に湯の盤銘なる「日に新にして又日に新なり」と云ふ語があるを見て、早計にも親を新の誤寫と認めたのであるが、實は親民が結構なのである。大學は昔の王者

の學問である、明德は王者自己の天賦を磨くことで、智を明にし德を煌やかすが第一、次には人民を信愛し、之と親しくするのが肝腎と云ふ事を敎へたもので、親の字は誤寫でも何でも無い。然るに親は新の間違ひとばかり思つたから、古聖人の意は民を親しむに在らず、愛して遠ざけるに在りと考へた。これ些細な事のやうであるが、昔の政治家たる武士の學校敎育は此古書を以て終始したのであるから、其影響は極めて大であつた。

故に偶ま小藩の明主などが、自ら其國内を巡檢し、親しく農工商の人々に面接する事でもあれば「勿體ない恐れ多い」と、何か世の中に有るまじき事が有つたやうに言做し、其被引見者を以て無上の榮譽とし、君主の盛德を頌揚したものである。今日から思へば甚しい馬鹿な事であるが、我々の父祖はそれが當り前と思うて居た。大名にして已に然り、公方樣即ち將軍は、恰も火の玉の轉り出たやうなもので、手も附けられず、觸れば必ず祟りがある。斯樣な世の中に出來た詞が即ち彼の「天子樣を拜むと眼がつぶれる」と云ふ極端なる尊貴の形容である。

尤も此大名や將軍の尊崇には、厭ふべき裏面の消息があつた。それは君民の中間に立つ武士に在つては、成るべく君主をして下民の情を知らしめず、下民をして君主の心を知らしめぬやうにするのが自己に好都合である。當時天子は政治を幕府に委ね給うて居り、日本の人民を治むるものは將軍及び其再委任を受けた大名であつた。其大名や將軍が民間の實情を知れば役人たる武士殊に其中の横著なる連中は己の身勝手を振舞ふことが出來ず、本

氣で政務を執らねばならぬ事になる。更に又一方から言へば大名や將軍の半可通は、家老等の執務の妨害にもなるので成るべく君主をして下情を知らしめぬやう、陽に之を九天の上に祭り上げ下民に近づかしめぬやうにしたものである。彼の佐倉宗吾の直訴の如きは、即ち此弊習の生んだ悲劇であるが、習慣と云ふは恐ろしいもので、此立憲政治の御代になつても、世間にはまだ宗吾時代のやうに政治家等が上の聰明を擁蔽する事の行はるゝものと思ひ、時々直訴など云ふ笑ふべき狂態を演ずるものが出て來る。

直訴は素より時代錯誤である、然し直訴あらしむるは爲政者の恥辱である。君民間消息の不通なるを信ずるものが民間に出るのは、現時の良制を心得ぬものゝあることを意味する、故に政府は常に成るべく然樣の迷想を打破するやうに務めなければならぬ。これについて一言するは至尊又は東宮の市中御通行に當り、無用の長き時間通行を禁止し、又は人民を叱呵し徒らに恐怖を抱かしむる如きは、人をして聰明擁蔽の一端と誤解せしめる一の陋習である。此事に就ては先帝陛下東宮の御時厚く御心を用ゐ給ひ、御出行毎に極めて鹵簿を簡畧にし給ひ、東宮御所より宮城へ、御往復の途など特に人通り少き道路を選んで御通行あらせられしは、小生の親しく目擊し奉つた所であるが、親しきが上に親しかるべき君民の間に、斯く御心を勞せしめ參らせたのは、警衛の官僚が餘りに恭敬し奉り、其所等を徘徊する人民を追拂ひなどするが爲である。何卒今後一層先帝陛下親民の聖意を體し、舊幕將軍大名の威を以て忠良なる人民を威嚇するなきやうに致したいものである。

たつとぶはたふとむであり、たふとむはたと云ふ感動言とふとむ即ち大なりとする形容詞から成立つ讃美の辭である。古は大なる物を美の代表物とした、支那人も羊大の二字を合せて美の字を造つて居る。君上をたつとぶと云ふ事は、親しく其貌を見、其言語を聞き、其智其德其勇其仁が等倫に絶するを知り、ア、大なる哉頼もしき哉と心から讃嘆する事である。君上は何處に在すかを知らず、親しく其御言葉も聞かず、唯自己の想像を以て多分斯くあらうとして崇敬するのは、野蠻人には相應しいが、文明上等の國民には不相應である。明治以前の會津と長州が共に忠君愛國の藩であり乍ら、正反對に孝明天皇の御趣意を取り互に賊と思うて相鬩いだのは、當時紫宸雲深く、公卿の輩が上下の間に介在し、下情上達せざりしが爲めであつて、遂には「今日以後の叡旨が眞の叡旨なり」なんど云ふ不可思議なることを承るやうに相成つた。回顧すれば實に此上下の隔絶の爲めに日本國民は非常の災厄を蒙つたのである。

されば明治大改革の劈頭に當り參與大久保利通は、歐洲より還つて來た岩下方平の意見を採り、大阪遷都の議を奉つた、其建言中に左の如く忠誠を披瀝した。

依て深く皇國を注目し、觸視する所の形跡に拘らず、廣く宇内の大勢を洞察し給ひ、數

百年來一塊したる因順の腐臭を一新し官武の別を抛棄し、國内同心一體、一天の主と申し奉るものは斯く迄に有り難きもの、下蒼生といへるものは斯く迄に頼もしきものと、上下一貫、天下萬人感動啼泣いたし候程の御實行擧り候事、今日急務の最急なる可し、是迄の通、主上と申し奉るものは玉簾の内に在し、人間に替らせ給ふ樣に、僅に限りたる公卿方の外拜し奉ることの出來ぬ樣なる御有樣にては、民之父母たる天賦の御職掌には大に乖戻したる譯なれば、此根本道理適應の御職掌定つて、初めて内國事務の法起る可し、右の根本を推窮して大變革せらるる可きは遷都の典を擧げらるゝに在る可し、何となれば、弊習といへるものは理に非ずして勢に在り、勢は觸視する所の形迹に歸す可し、今形跡上の一二を論せんに主上の在す處を雲上と云ひ、公卿方を雲上人と唱へ、龍顔は拜し難きものと思ひ玉體は寸地を踏み給はざるものと推尊し奉りて、餘りに尊大、高貴なるものゝ樣に思念され、遂に上下隔絶して其形今日の弊習となりしものなり、敬上愛下は人倫の大綱にして論なき事なから、過れば君道を失はしめ、臣道を失はしむるの害ある可し、仁德帝の時を天下萬世稱讃し奉るは外ならず、即今外國に於ても帝王從者一二を卒して國中を歩き、萬民を撫育するは、實に君道を行ふものと云ふ可し、然れば更始一新、王政復古の今日に當り、本朝の聖時に則らせ、外國の美政を壓するの大英斷を以て擧げ給ふべきは遷都に在るべし、是を一新の機會にして、簡易輕便を本にし、數種の大弊を拔き、民の父母たる天賦の君道を履行せられ、命令一度下りて天下慄動する所

の大基礎を立て、推及し給ふに非れば、皇威を海外に輝かし、萬國に御對立あらせられ候事叶ふ可らず

右は實に堂々たる大文字で、我國に於ける上下隔絶の弊害を打破するの警鐘であつたされば明治元年兵馬倥偬の際天皇初めて東京へ行幸の御時は、鹵簿を簡にし、御輿の戸を開きて沿道の人民に玉顔を示し給ふたと承る。此時我國の人民は千有餘年目に初めて父母の尊顔を知り、君民の間に藹然たる情味の萌すのを覺えたに相違無い。然るに其後又何時となく、宮内官などが舊弊を復活して獅子の威を借るの狐を學ばんとしつゝあつたことは皆人の好く知る所である。近時其弊又大に改まつたのは皇室の貴い思召に出るもので、人民は頻に葵花向日の誠を傾けて居るのであるが、今日でも往々宮廷列車と行違ふ汽車の窓を鎖させ、乘客一同をして徒らに車内に直立不動の姿勢を取らしめ、以て皇威を輝かしたるかの如き態度を取る事があるのは、親民愛下の御趣意を辨へざる不忠千萬なる取計ひである。

四

前回に一言せし宮内官等の神經過敏さは、所謂危險思想の蔓延を信ずる所から來るもので彼の幸德や難波の如き不逞漢が一人ならず現出した例もあるから、決して一概に攻撃すべき事では無い。然し凡そ王者の德は其大智大度大勇に在るもので、ナポレオンの如き身を一將校に起した帝王ですら、數百回の戰場に常に白馬に乘つて陣頭に立つた。我皇祖神武天皇は皇兄と共に長髓彦を攻めて克たず、長兄は賊矢に薨じ、二兄は途中より船を廻らして故國に歸り去り給ひしにも屈し給はず、山河を跋渉して賊巢に迫り、遂に之を征服し給ふたのである。神武と云ひ、雄略と云ひ、桓武と云ふ如く我皇系に武の字の諡號を有し給ふ天皇は、皆經國の大德に在し、不敬漢の反抗など毫も意とし給はざりし御方である。又神功皇后は女子にして海外まで威を振ひ給ひ、日本武尊は西は筑紫の南端より東は蝦夷境までも矢石を冒して進み給ふた。天命我に在りと信ずれば孔子の如き儒者先生でも、暴徒に圍まれて平然として居る。況んや我皇室の棟梁にて在らせられる御方に在りては、偶一二の狂徒が現はれたりと云うて、御召列車を他の列車から拜することを懼れ給ふことの有るべき筈が無い。戰々兢々汽笛の聲にも胸を轟かすは王者の大威力を知らざる臆病官吏の事である。今後は彼等も宜しく其心掛を改め、我國民をして如何なる場合にも仰いで龍顔を拜するを得、愛皇の情を深からしむる樣、精々注意すべき事である。

更に又彼等の蒙を啓く爲め一言せんに、昔時の大不逞漢東の漢の直駒は、御幸の際に崇峻天皇に近づき奉りしものでは無く、警戒の嚴なる宮中に潛入したのであつた、而して其背後に在りて彼を使嗾せし者は、堂々たる廟堂の大官蘇我の馬子に非りしか。又正應三年の春、夜中伏見天皇を襲ひ奉らんとし、其二人の子供と共に宮中寢殿に闖入し侍臣の爲に見出されて紫宸殿上に自殺した淺原爲頼は民間の出した不平の徒に非ず、其佩刀は前參議藤原實盛

の秘藏物であり或は龜山上皇にも關聯する處ありとの評判が立ち、上皇は誓書を作つて北條時宗に賜ひ、事漸く解けたりと大日本史に記してある。蒲生君平高山彦九郎等の如き土民中から尊王無比の男の出たる事蹟は有るが、公卿の中から彼等に比すべき者幾人現はれしか、後の太政大臣三條等の七卿は、天皇の御爲一命を惜まぬ由歌には詠んで居ても、自黨の形勢不利と見れば直に天闕を棄てゝ長州に遁逃したでは無いか。政府の要路に立つ者や宮内官等は常に民間を以て危險思想の叢窟不逞漢の發生地と考へ、動もすれば臣民を皇室より隔離すれば大丈夫と思ふ樣子があるが、是は甚だしい間違ひである。

元來日本人は世界中最も情に脆く又反抗心の强い人間である、今度の諒闇につき、五日間廢朝且音曲歌舞御停止と聞けば殊勝にも落語の寄席までも黑布を垂れて休業する。否獨り御停止中のみならず天皇陛下御病氣御重態と承つた時も、國民は皆自發的に其娛樂場を閉鎖し、藝人は皆其稼業を休んで謹愼した。御崩御の後は世間から醜業者として擯斥せらるゝ者の中に、喪章を製し之を路頭に賣り、其賣上金を貧者の救助に差出す者さへも出て居る。小生の寡聞なる未だ斯る優しき心根の人民の他國に有ることを承知せぬ、實に愛すべきは我同胞の民である。然し其代りに、彼等は若し權力者から柔順を强ひられ、忠義を要求せらるゝやうな事があれば、忽ちに反抗心を起こし、甚だ優しからぬ人民となる。德川幕府の江戸に於ける民情が即ち其立派なる見本である。此明白なる見本の有るを忘却し、漫りに皇室の尊嚴を喋々し、土下座の上に土下座を求め、又は人民の其愛慕する皇室に近づくを妨げんとするは、實に思はざるの甚だしきものである。眞の危險は即ち其處に發生するであらう。

五

古昔支那の帝王は深宮の裏に生長し、我儘にして愛憎甚だしく、喜怒常なく、其前に出でゝ政務を奏上する大臣は、宦官宮妾の讒言も有るから、如何なる叱責黜罰に逢ふかも知れぬと思ひ、常に薄氷を踏む想を爲す、故に上奏文の終には誠惶誠恐頓首死罪死罪、又は昧死以て聞すなどと只管に低頭平身して雷霆の頭上に落下せざらんことを祈り、敢て龍顏を仰ぎ見る者も無い有樣であつた。是を眞似て我國でも文章の上では或は泥土に其面を突込み、或は君上を雷扱ひにし奉ることがあるが、記紀の記するところを見、古の日本に於て君と臣君と民の親しかりし美風を承知するものは、甚しい支那風の模倣は片腹痛く思ふのである。

明治の王政復古は神武の昔に返るの御趣意であつた、故に君民の間も大久保建言の如く、古代の親密に返るべき筈であつたが、千有餘年城鼠社狐を學んだ公卿の一族が皇室に附著して社會的門閥的に蘇生した爲に、虛飾虛喝の風其痕を絕つ能はず、其甚しきは維新草々從三位であつた島津の家來西鄕吉之助に正三位を與へ、冠裝束の麿仲間に引入れんとした

る如き、徒に田舍者たる功臣を苦しめるものであつた。薩人山下房親の談に、大西郷は明治の初年に「陛下の御身邊に扇の骨削りが多くて困る」と言ふたとの事、彼が木戸と協議し村田新八、高島鞆之助、山岡鐵太郎の如き素朴の武士を御左右に侍せしめたのは、君民膠漆の交を固くするやう、君德を補翼し奉る深意であつたに相違無い。「扇の骨削り」は公卿を罵る詞で、彼等は數百年來皇室に寄生し、表面に位階を高くして傲然人に驕り、押繪や扇の骨削りを內職にして政治の政の字も知らなかつた者共であつた。斯る輩は皇室の人民に近づき給ふことを以て自家の化の皮の現はるゝ基となし、君民隔離時代の習性を持出して雲上と地下を分たんとするのである。此狡獪なる金モール手段を巧に利用して藩閥政治の擁護策を按出し、今に其遺策の行はれて居るのが伊藤博文氏の公侯伯子男で、支那の古代に存在した爵名を以て西洋の封建的階級を直譯し、金ピカを以て天下を眩惑するの趣向は流石大才子の手際では有つたが、僅々十數年前に同じ人物等が眞先に立つて破壞した舊幕の腐臭以上に階級制度を復興したのは、一旦進めたる時計の針を又後へ戻したやうなもので、世は既に明治の午前八時になつて居乍ら、時計のみは元の午前一時に返り、折角撤去せられた大名の代りに散髮頭の齊桓晉文が現はれ、君民の間又隔絕し始めた。凡そ物は相接近すれば眞實が現はれ、遠ざかれば虛僞が行はれる。春の山々に一抹の霞美は美なりと雖も、山の眞景は見る可らず、山より里を眺むるも同樣なり。明治八年の頃福澤先生曰く、我國は封建時代長かりし爲に皇室と人民と接近するの機會なく、未だ君民の間に濃かなる

情誼を生せず、若し憂國者ありて俄かに此情誼を造り出さんとあせる時は、天下は僞君子の充滿する場處となるに至るべしと。明治の中年より大正の終へかけ、國中に僞君子を見ざりしや否、明治十七八年頃佐賀の人丹羽雄九郎、鹿兒島の前田正名両氏は國事を談じて啼泣し、あとで互に彼は僞君子に近しと評し合ふたと云ふ話が有つた。又水戸の人藤田一郎と言ふ者があつて、忠君愛國を標榜して雜誌を發行し官吏に賣付け、又丸山作樂は福地源一郎、水野寅二郎と帝政黨なるものを組織し、明治日報と稱する新聞紙を發行したが、世人は僞君子なりとして取合はず、政黨加入者殆ど一人も無く、俗に彼等を笑つて三人政黨と言ふた事がある。是等は著しい釣名家の標本であるが、爾來四十餘年を經たる今日、眞君子と僞君子の割合果して如何、賢明なる世人は自からこれを算出し得るであらう、君民の間に間隔を置き、中間に在る者が無理に親愛の情を造らんとすれば必ず此の如き弊を生ずるのである。

六

異種の金屬を接觸せしむれば其間に電氣を發生すと云ふヴォルタの法則は、濕布なる良導體が其間に介在するに因つて一層其現象を顯著にし、若し不良導體を挾めば之に反するのである。君民の間も其如く、中間に介在する官僚の氣風如何によつて、親しくもなれば疎

くもなる。親しければ其處に電氣以上の大動力を生じ、疎くなれば國家の法制は半ば其効力を喪失する。

君德の本質は民を愛するに在る、民德も亦同じく君を愛するに在る。然るに從來君側に侍し、若くは君權の光を受けて政務の局に當るものは、君の民を愛し給ふことをのみ喋々し乍ら、民をして君を愛せしむることを忘れ、唯君を畏れよ、尊べよ、近づく勿れ、遠方から拜み奉れと云ふ流儀で、民をして自から卑しみ、自から恥ぢ、自から汚れたりとし、自から咎ありとするに至らしめる。封建時代殊に其甚しきを見たが、明治中葉以後の官僚は之を移して皇室に對する人民の心得とし、君は好く民を愛し給へども、民は君を愛するを得ず、愛するは即ち褻れ近く所以にして不敬に渉ることであると言はぬばかりの態度を執る。公侯伯子男などいへる人爵を熾にし、自から皇室の藩屏などと稱するものに取つては、斯くすれば種々の便利も有らうが、それはヴオルタバイルに不良導體を挾むに等しく國家をして活躍飛動せしむる君民相愛のポテンシャルは決して發生せぬ。

故に小生等の官僚に對する註文は、民をして心の欲するまゝに君を愛するを得せしめよと言ふのである。義經千本櫻の淨瑠璃に出る鮓屋の娘は、唯己が鮓屋の娘であると云ふだけで、三位中將を愛する能はずと言ふ。是は身分によつて人を愛することさへも無禮とする彼の封建時代に於ける國民の氣風を描き出して妙ではあるが、若し今日の日本に猶此類の思想を存すとせば、それは國家の祥事に非ず、天皇が民を愛し給ふ如く、我々も亦天皇を愛

し奉りて少しも差支無きことにせねばならぬのである。

小生が斯く長々しく痴人の夢に似たる事を述べるのは、小生自から我今上陛下を愛し奉ると申上度いからである。世間には天皇とさへ申せば神武も仁德も武烈も安康も同一に思ふかの如き人無きにしも非ずであるが、古書を見れば、雄畧天皇の御時、初め天皇剛猛にして人命を輕んじ給ひしにより國民竊に大惡天皇と申し、其後天皇大に民業を奬め、又民を愛し給ふに至つて、大善天皇と申し奉つたとある。愛すべき仁德天皇を愛し奉り、恐るべき武烈天皇を恐れ奉るは國民當然の心であつて、決して不敬と言ふことは出來ぬ。若し此愛恐が不敬なれば、學校に於て歴史を敎へることは直ちに不可能となるであらう。偖小生が此前提の下に我今上陛下を愛し奉ると申すのは、今上陛下の御有樣を左右に侍する者共から漏れ承り、御性行に感服し奉るからで、敢て諛言を献するの佞民ならんとするものでは無い。陛下は未だ春秋に富ませ給ふが、大正十年東宮として歐洲諸國を御訪問遊ばされた時は、御歳僅に二十一、普通民間の中流の壯年輩とすれば、未だ一人前の人間と言ふを得ず、學校に在れば高等學校を出たか出ぬか位の處に居るものである。若しこれを世間の交際社會に突出せば、唯赤面して逡巡するばかりであらう。然るに陛下は香取、鹿島に召して世界の大海上に乘り出し給ひ、歐洲各國有數の人物と臂を把て談論し、磊々落々然かも好く品格を保ち給ひ、逢ひ奉るほどの者皆敬服し奉らざるは無かりしと云ふ。其事は委しく載せて二荒澤田両氏の著はした御外遊記に在る。小生は又日夕陛下に咫尺し佛語の御導きをしつ

ゝある海軍少將山本信次郎氏とは多年の知り合で、曾て氏から聞得たる事も耳底に留めて居り、此君こそは我等國民の情を竭して愛慕し奉るべき御方と信ずるのである。

七

明治二十年頃德富猪一郎氏が「將來の日本」を懷にして東京に上り其新しい文章が「日本の青年及び其敎育」と相前後して讀書界に現はれて以來、平民禮讃は一種の流行となり、今日に至つても猶頗る熾である。文筆に從事するもの何時となく其平民の語を使用するに慣れ、皇族の御方や華族、大官連の言行洒落なるものに逢へば、之を形容して平民的と云ふことである。實は平民中にも昔の鴻池善右衛門の如く、住吉參りに數十人の伴を連れ、關取角力に左右から團扇で扇がせて歩いた者もある、それを平民は一切空威張をせぬ者と極めて仕舞つたのも可笑しいが、我々新聞記者往々平民ならざる宮樣に「平民振り」を發揮し給ふなどと筆を辷らす、平民振りとは平民が平民らしく振舞ふことで、宮樣の簡易活潑に在すのは良き宮樣の「良き宮樣振り」である。平民に限つて謙遜にして、親切なりとするは、昔しの平民たる雲助を見た事の無き人が、德富先生の名文に醉はされし結果かと思ふ。士族にしても神崎與五郎は、馬方丑五郎に對し平民以上に優しかつた、猶好く考へて見れば平民々々と云ふのも矢張り階級思想であるから餘り濫用せぬやうに致したい。

偖我陛下も東宮の御時、何人にも平等に御言葉を掛給ひ、又普通人の如く振舞ひ給ふと云ふので、平民的の形容詞を蒙らせ給ふた御方であるが、小生は然樣な事に涙を流すものに非ず、陛下が假令東宮の如く威儀を正し沈默し給ふたとしても、別に愛慕し奉る理由があるのである。

其第一は陛下が正義を好み給ふからである、竊に承れば陛下ローマ府御滯在の時、或繪畫展覽會へ成らせ給ふたる由。其時隨行の大使館員某御氣に召した畫に印を付け御歸館後自己の計らひで、之を購求せんとしたが、展覽會方に開會中の事とて、先方は之に應じなかつた。館員は執念くも伊國宮內省の大官を說き、其威力を假りて無理に其畫を卸させ、得意然と御休息所へ持參した。天晴れ御感に與るかと思の外、陛下は其手柄談を御聞になるや御氣色宜しからず、貴君の取計は正しからぬ事であるから予は之を好まぬ、速に謝して先方へ返納せられよと常に無く大聲に叱責し給ひしとの事である。其人は背に汗して引下り早速其畫を元へ戻したさうであるが、陛下は其後曾て其事を左右の者にも語り給はざる由、正しきが上に人を憐れみ給ふ御思召、唯此一事だけでも小生は君德の盛なることを感じ奉る者である。

次には陛下が小事にも無理の無きやうに御心を用ゐ給ふことである。御召艦香取でシンガポールからコロンボへ御航海の途中、シンガポール在留邦人の献上した小猿が、何時しか艦具の螺旋を拔いて口に入れて居る、水兵がそれを取らうとして猿と爭ひつゝあつたのを御

覽になり、水兵を制し早く角砂糖を取り來れと仰せられた。水兵畏まつて角砂糖を持參したら、陛下は自から其砂糖を猿に與へ給ひ、猿が砂糖と引かへに吐出した螺旋を水兵に手渡し給ひつゝ、猿の如き獸類は善惡の分別無く、唯其天性に任せて行動するものであるから、決して無理に其持てる物を取らんとして打擲などせぬやうとの御敎訓を賜はつたと云ふ事である。是は御外遊記の記す所である。

人と猿ばかりで無く、人と人と相對し權力に大小ある場合も、此御敎訓の通り、强者が其力に任せて弱者を押付け、强ひて其の意思を行ふのは不賢明且つ不道德である。又人と雖も愚人は自から其行の善惡邪正を判別する力が無いから、假令惡事を爲しても、實は其罪に非ずとも言ふべき場合が多い。キリスト敎の信者は人に害を受けた時神に祈る言葉に「願くは彼等を許し給へ彼等は其惡の惡たることを知らざるものなれば」と言ふが、實に其通りである。然るに往々にして人の上に立ち人を使役するものにして人の知らざる罪により て人を刑するの不仁を行ふことが多いのは慨はしい。古來君主が臣下に雷霆の如く恐怖せられたのは全く其爲で、遂には君主を除かんと謀る者あるに至る。今我陛下に至つては斯る小事にまでも無理なかれと慈仁なる御心を勞し給ふ。古風なる大臣連は宜しく其「死罪々々」なんど云ふ因習的忌はしい詞を西の海へ拋ち去るべしである。

御外遊記は陛下の聰明多識に御在し沈實にして宏量なることを多くの事實によりて稱揚し奉つて居る、是最も我々臣民等の聞くを喜ぶところである。然し小生は陛下が常に諸外國の時情に注意し給ひ、好く國家盛衰の分れる基たる產業上に御著眼あらせられるのに敬服し奉るものである。二荒伯は記して云ふ。

此夜(五月十三日)殿下は日本大使館に於て英國皇太子殿下を主賓として晩餐會を御催しになつた、總理大臣ロイド・ジョージ氏、大藏大臣チェンバレン氏、上院議長バーゲンヘッド氏、樞密院議長バルフォア氏等知名の政事家宮內高官社交界の名士貴族等が來賓として列席した、殿下には食後會場の廣間で主賓の英國皇太子殿下と暫時御閑談の後、これ等名士とも一々御會釋遊ばされた。

殿下がこれ等英國の大家を御相手に、其の豐富なる御話題と悠悠迫らぬ御態度とを以て御話しになる樣は、實に御傍でこれを拜して何とも申上げやうのない有難さを感じた。殊に首相ロイド・ジョージ氏との御會談の如きは、畏れながら熟練の駐外使臣と雖も三舍を避けん許りの御手際であらせられた。殿下は先づ此の如き世界知名の士に初めて御會見遊ばされるのを喜ぶ旨を仰せられて、當時恰も高潮に達して居た石炭罷業に就ては頗る御同情の旨御話しの後、その近情を御質問になつた。首相はこれに對して罷業の基因最近の狀勢など逐一申上げて、殿下の御同情に對して御禮を言上した、すると殿下は更に話題を日英の國交關係に及ぼされ、日英兩國がよく同盟の誼を重んじて、東洋平和否

世界平和確保の爲めに貢献した事の尠からぬことは頗る欣ばしく思召す旨仰せられた。ロイド・ジョージ氏は殿下の御言葉に全然共鳴して、日本が盟友として永年の間終始變らない友情を守り、殊に歐洲大戰の際には正義のために尠なからぬ犧牲を拂つて、聯合與國の爲め努力せられたことは、上下の頗る多として居る所であつて、政府當局に於ては、將來日英兩國の親善な關係は長く持續させるやう、十分の努力を吝まぬ覺悟である旨を言上した。

更に殿下は先年パリ平和會議の際、英國全權一同殊に首相自身が、よく日本の主張を諒解して日本全權に深厚な同情を表せられた事を心から感謝する旨を御話になると、同氏はそれは實に過分の御言葉で、自分としては同會議中終始日本全權と緊密な關係を保つに相協力し、彼の大事業を成し遂げた事を答へ云々

此御會話は二十分間に渉つて居るが、ロイド・ジョージならざる我々も、陛下が二十一歳の御壯齢で内外の國事に御心を用ゐ給ふことの厚きに驚かざるを得ない。

陛下は斯かる御心で在らせ給ふから、英國御訪問の途地中海のマルタ島に御上陸遊ばし第二特務艦隊員として大戰中地中海に出張し、戰死を遂げた我が勇士七十七人の墓に御參詣在らせられ、花環を捧げて恭しく御禮拜遊ばされた。墓は同島ヴアレッタ市外の一丘に據る共同墓地の一角、時は大正十年四月二十四日、折から咲き出る淋しい草花の中に在る丈六の立つ尖標の表に「大日本帝國第二特務艦隊戰歿者之墓」と記されてあつた。御參詣の光景を見た英國デーリーグラフイック新聞通信員は左の如く其本社に打電して居る。

東宮は進ませられて御帽子を取らせ給ひ、お頭低く御禮拜遊ばされた後、更に進んで一段上り給ひ、墓標に對して再び御禮拜あらせられたが、軈て墓標に面し給ひしまゝ後向に段を下り、三度御禮拜遊ばされ、初めて御著帽あらせられた。

ア、我が皇上は是れ程に臣民を愛敬し給ふのである、我々臣民皇上を恐れ奉らずして此方よりも敬愛し奉るに何の不都合かある。願はくは今後我官民共、日本は特殊國と云ふ口先ばかりの自慢は止め、眞に特殊國たる實情を世界に示して貰ひたいものである。小生は微微たる一個の新聞記者であるが、敢て筆を揮つて大書して云はんとす「我は我が今上天皇陛下を衷心より愛慕し奉るものなり」と。

313
90

昭和二年三月一日印刷
昭和二年三月五日發行

〔非賣品〕

著者　大阪市東區半入町七三八　土屋元作

印刷者　奈良市般若寺町二十一番地　八田德治郎

印刷所　奈良市般若寺町二十二番地　八田印刷所
電話一一〇四番

終